神話論理における変換

「1950 年代末、神話研究の方法論序説とも呼べる『野生の思考』の主題が急速にそして一挙に形をととのえてゆくという印象がある。[1]」と、レヴィ＝ストロースの戦後の営為について渡辺公三は記している。

レヴィ＝ストロースの、1964 年～1971 年までの『神話論理』4 巻は、アメリカ先住民の各地域の神話のストーリーの間の比較対照であり、基準神話と名付けられた「ボロロの神話」との比較関係、基準神話と各部族の神話ストーリー間の「差異の二項対立関係」、変換関係の追跡である。それは神話を抱えて生きるアメリカ先住民の思考回路が、神話ストーリーの各地域での変換の様相として現れている、その「野生の思考」の展開過程の確認といえよう。

レヴィ＝ストロースはその中で神話素という概念を用いて変換関係を眺めているのだが、その手法はソシュールの「差異の二項対立関係」からの啓示であり、各神話のストーリー展開、そのディスクールを「差異の関係」、変換関係（二項対立関係のずれ動きとしての変換）ととらえてゆく手法である。

１．「親族の基本構造」まで

1941 年、ニューヨークの「亡命生活」の中でレヴィ＝ストロースは、「新社会研究院」の講師同志として、ロシアの音韻論のヤコブソンとの出会いを果たしている。互いの講義を聴講しあう仲となり、生涯の友情をスタートさせる中で、レヴィ―ストロースの講義を聴講したヤコブソンの「それを書かきたまえ」に触発され 、1943 年には「親族の基本構造」の執筆に入り、それをパリに帰国しての戦後、1955 年に出版している。

「親族関係の生成」こそが、人間の自然の状態から社会の状態への移行を記し付けるものであり、他集団と自集団の女性の交換に係る規則、各集団の婚姻規則（インセスト・タブー）は、集団間の交流（生活物資・情報・女性の交換）、親族関係、互酬的な集団間の関係を生成する、女性の「交換のための交換」の規則として、その「三つの交差イトコ婚の体系が互いに変換の関係にあり、一つの構造をなしている[2]」として示し出したわけである。

交叉イトコ婚の３類型のうち、二つの半族の間での女性の交換を「限定交換」と名付け、そして３つ以上の集団間での交換を「一般交換」として名づけ、後者は複数の世代の流れの中で各集団間の互酬性が達成されるという、いわば多世代にわたる経過、時間軸を入れての集団間の互酬性を達成する婚姻規則（インセストのタブー）の「構造」を示し出している。

---

[1] 渡辺公三『闘うレヴィ=ストロー』平凡社新書　498　p 167　2009 年 11 月 13 日

[2] 小田亮『レヴィ＝ストロース入門』ちくま新書 111　P20　2012 年 9 月 20 日

渡辺は「共時態の中にある運動すなわち変換をとらえる事こそレヴィ＝ストロースの構造分析が狙ったものだったといえよう[3]。」と指摘している。

※半族：ある社会集団が 2 つの氏族あるいは胞族から構成されるとき，その双分組織の一方の単位をいう。あるいは単に，2 つの外婚集団が存在する共同体をいう場合もある。(ブリタニカ（ブリタニカ国際大百科辞典）

２．神話論理を読み解く

1962 年の『野生の思考』『今日のトーテムズム』は、「親族研究と神話研究を結ぶ中継店であり、その両方を包括する『分類』をテーマにしており、彼の人類学的研究を集約しているともいえる。[4]」と指摘されているように、その後のレヴィ―ストロースは 1964 年～1971 年の『神話論理 4 巻』、そして 1969 年度講義をもとにする 1992 年の『大山猫の物語』へと向かって行く。

「神話論理」解読の方法論の提示とされる『野生の論理』であり、『親族の基本構造』から『神話論理』への移動は、「婚姻関係の構造」の中に「婚姻の基本構造の体系」をみいだしたレヴィ＝ストロースにおいて、そこから経済機構や心理機構が影響を与える「複合構造」へという文脈に移行しているのだが、この婚姻規則の変換関係は、その変換の中に「無意識という形で人間の精神に現存している」ところの在りようを、証明ができなかった事も遠因にあって、「社会生活上の外的制約のより少ない神話研究に向うことになる[5]」とされる。

『神話論理』は、神話ストーリーを語る人々における、精神機能の流れ、あるいは展開過程の追跡であり、この神話論理のストーリー展開の検討によって、「無意識という形で人間の精神に現存している構造」のありようを、「神話論理」の中に見出す試みと理解されよう。

３．「神話論理」のストーリー展開と人間の精神機能の流れ

レヴィ＝ストロースが神話の中に見出すアメリカ先住民の精神機能の流れ、「トーテム的分類の思考」には、【「自然種の間の差異関係と人間集団相互の差異関係が類似性による『隠喩』としての結び付き、またカラスとタカのように意味論的に隣接した、あるいは空間的に隣接した「隣接性による『換喩』」、そして「換喩と隠喩とのあいだの転換ないし反転」が指摘され】、「関係を考察する」という共通する思考方法、そうした変換の在り様が示されている。

---

[3] 渡辺公三『闘うレヴィ=ストロー』平凡社新書　498　p 149　2009 年 11 月 13 日

[4] 小田亮『レヴィ＝ストロース入門』ちくま新書 265　P20　2012 年 9 月 20 日

[5] 小田亮『レヴィ＝ストロース入門』ちくま新書 265　P117　2012 年 9 月 20 日

その変換の関係を、多様な二項対立（高い／低い、空／地上、太陽／人間）、時間の対立（緩／ 急、均等な持続／不均等な持続、夜／昼）において互いに検討、どのような変換（隠喩、換喩、反転）関係にあるかの検討を進めている。

そして１巻２巻においては、各神話群のそれぞれの項と項の間の対立、差異関係を対立させるのだが、3 巻に及んでその検討は「決定的な一歩」が踏み出され、「それらの項がとり得るさまざまな対立の仕方（マナー）をお互いに対立させるもの[6]」へ、それらの項同士において空間的な対立関係、天体の旅や、季節の交替、昼夜の交替など時間的な周期性の対立を組み込んで対立関係を構成するに至るとされている。この決定的な一歩とは、中間項の設定、縮約などとして説明される、変換の形式の中の複層展開を踏みだす流れと思われる。

レヴィ＝ストロースは、エリボンとの対話の中で民族学とは何よりも**「精神の学[7]」**であるとしている。変換という人間の精神の動き、その働き、その様式とバリエーションの拡張の様相、「神話論理」と「言語の体系」の深まりの様相とは双方向的、重なり合っている。

神話のストーリーの展開は、あたかもソシュールの言語論における精神機能の恣意性を言語の線状性が限定しつつ、言語使用の集団的経過の中での言語体系の構築の過程を、その現出せしめる「精神の動き」と同調的であろう。その「無意識」の動きについて、親族構造の基本構造、その変換には、人間の精神機能の中の習慣的、あるいは定型的な流れ、人間の精神に現存するところの動き方、「無意識」とされる動き、その傾向を踏み続けつつ展開する「変換」と同調的であろう。それは精神機能を駆動し、「差異の二項対立関係」を構成して意味を括り出し、新たな意味を生成し「変換」を進めるという、母国語言語の構築の流れ、言語における体系性構築と同調的、それを跡付けていると理解される。

神話ストーリーの展開過程、その膨大な「変換関係」を跡付けるところの「神話論理４巻」は、その展開過程は無意識という精神機能の関与をもって進みゆくとして想定されている。

４．言語の体系

言語の体系は、体系の不変性がその属性でありながら、言語使用、その実践課程、集団的なランガージュの駆動の渦の中で、通時・共時変換過程を産ましめる。言語的意味は、人間が自らを取り巻く外界、生活世界に囲まれて、その中である「差異への気づき」、その「感興」を、「差異の二項対立関係」の形式をもって、あるいは解釈として括り取るところの精神機能（ランガージュ）、その駆動態としての言語的意味である。

---

[6] 小田亮『レヴィ＝ストロース入門』ちくま新書 265　P190　2012 年 9 月 20 日

[7] レヴィ＝ストロース/エリボン『遠近の回想』P200　みすず書房 1991 年 12 月 25 日発行

そして「音素配列集合」として表象される言語的意味の単位である各「シーニョ」、その間での「差異の二項対立関係」の集合として、「群化」をなして「シーニョ」を格納するラング（言語)、そうした言語の体系である。

「音と意味」が絆づけられた各「シーニョ」同士の関係、それは言語表象時の恣意なる要請、類推作用とされる精神の動態に同調する「群化」をなして、ラング（言語）の体系において格納されている。その「シーニョ」格納の様式と相互に支えあう、言語の恣意性に同調しつつ体系化された言語の体系、この中で、ディスクールの形成にむけて「シーニョ」が選択・結合される、その法則性「ルールの集合」としての言語の体系が浮かび上がる。

そして言語表象時の人間の発声運動上の制約関係の中で、「音の揺らぎ」をきたす場合には、「シーニョ」の音と意味の一体性をもって、音の揺らぎが意味を揺らがしつつ、その経過において引き起こされる変換過程（共時変換）が現出するものであろう。「言語の体系」は「シーニョ」がディスクールとして活性化される場面での「シーニョ」の選択と結合、動き方における「ルールの集合」として、言語使用の展開過程を規定している。

5・変換と構造

「女性を『交換せよ』という命令であるインセストの禁止（タブー）は、人間集団のカテゴリー化と表裏一体をなし、集団間のコミュニケーションを生成する。そして音素と同様、多様に見えるさまざまな『婚姻規則』の間には対立と変換すなわち構造が見い出される。親族関係は、ある意味では集団間の関係を生成する言語であり、この言語によって人間は自然の世界から文化へと移行するのである。[8]」と表現されている婚姻規則、「関係を創造する」その機能、その産ましめた変換関係が紐解かれ、婚姻規則によって親族関係は生成され、「女性の交換」・婚姻規則にみられる変換の在り様が構造として紐解かれる。

※親族関係や神話ストーリーにおける変換関係（ルール）の集合、それが構造であり、ある変換様式へと安定してゆく経過がその社会的構築過程といえよう。体系性（ルール集合）が構造を抱えつつ変換を孕む、そうした親族の基本構造が示され、それは「言語の体系の構築過程」においても、その流れにおいて同様であり、人間の意識の中の無意識を含みつつ進むという、互いの様態は同調的であることが示されている。

そして言語音声を構成する基本単位である音素について、「音素の実在は、その音的個性のうちにあるのではなく、音素が互いに結ぶ対立的、消極的関連のうちにあるのと同様、婚姻規則の表意作用は、諸規則をばらばらに研究してもとらえられず、それらと互いに対立さ

[8] 渡辺公三『闘うレヴィ=ストロース』平凡社新書 498 p 127-128 2009 年 11 月 13 日

せない限り浮かびあがってこない[9]」とされ、記号の構成要素としての性質が示される。
※「『関係の世界において意味を持つものは差異だけである』というソシュールの根本的認識[10]」。記号構成の各構成単位自体は意味をなさず、構成単位の組み合わせ、その組み合わせの変容のありよう、二項の組み合わせにおける比較対照、差異によって意味を生じるという形式が示される。

6．　『野生の思考』民族学とは何よりも「精神の学」[11]

ソシュールの言語の体系において、「シーニョ」の格納の様式というべき「群化」の構造は、言語の恣意性とされる、時空を超えて自由に飛翔、展開する人間の精神機能、類推作用に同調的であろう。言語の体系が言語的意味の単位「シーニョ」を格納すると表現されている、その格納の様態は「群化」とされるが、類推作用に同調する「シーニョ」間関係として「グルーピングの形式」をなしているとされる。言語の意味の単位「シーニョ」は、人間の類推作用・恣意なる展開にかなう格納の形式をもって、人間の言語活動、コミュニュケーション活動を、ディスクールの成立へ向けて意味を繋いでいる。その群化の構造、恣意に展開する人間の意識活動は、レヴィ＝ストロースの神話論理の中の各ストーリーの変換のありようと同調的、共通的であろうと考えられる。

『神話論理』は、神話のストーリーの展開の中の「各項の関係」の抽出とその「差異の二項対立関係」、その変換過程の提示による「野生の思考」の探索といえようが、それはソシュールの言語論からの啓示、「シーニョ」間の「差異の二項対立関係」、それらを群化する言語の体系性との相同性を示している。各神話のストーリーの展開課程、各神話間の「変換過程」の検討は、ヤコブソンの音韻論、言語音の基本単位 12 対の弁別特性、その「差異の二項対立関係」という視点と同調的であり、ソシュールの言語論の変換からの啓示をうけての、「野生の思考」「神話論理」の探索として理解されよう。

レヴィ＝ストロースが神話論理へのアプローチにおいて示した変換の諸相、それらは人間の精神機能の駆動形態、時空を超えて展開する恣意なる展開の様態であり、それはソシュールの言語論における、新たな意味を括り出す動態、互いの生活世界の解釈としての言語的意味を配分する、その母国語集団における無意識的な流れと同調的であり、「物質世界のあり方とは独立に」展開する人間の精神機能が介在する「融通無碍」な「変換」、その展開過

---

[9] ローマン・ヤコブソン『音と意味についての 6 章』p10 みすず書房　2008 年 11 月 11 日
[10] 丸山圭三郎 『ソシュールを読む』 P71　岩波セミナーブックス 2　2009 年 3 月 13 日
[11] レヴィ＝ストロース/エリボン『遠近の回想』P200　みすず書房 1991 年 12 月 25 日発行

程に重なる。それらの変換過程の法則性、習慣性、ルールとしての体系性であり、それを抱え構成される「構造」であろう。変換を孕み不断の変換という動きを抱えつつ、一定の構造下にある一連の事象を、「体系」として捉えていることが示されている。

類推の過程は、「隠喩」「換喩」「反転」あるいはアナロジーとして、様々 な「２項対立のコード」を抱えて、それらを媒介項にして類推が展開される構造を有して『神話論理』は展開し、 そのような思考方法を追いかけつつの分析によって「神話の論理」が顕かにされていると言えよう。

「神話論理」を生み出したアメリカ先住民の精神の流れは、ソシュールの言語論においては、ラング（言語）の体系と重なり合う、自らの生活世界に対峙して、体験する差異の感覚、感興、その「差異ゆえの亀裂をめぐる調停」の流れと重なる、あるいは同調的であろう。

それは元に戻る事はできないのであり、消す事のできない変化、刻まれた差異のあちらとこちら双方を対峙させる二項対立を、さまざまにアナロジーを重ね、媒介項、中間項をつくり、あるいは対立する二つの両義的な意味を具有する媒介項（蜜や灰）を関与させて、差異、亀裂の縮約を図っている、その動態と言えよう。

こうした精神機能の流れ、その総体は、ソシュールの言語の恣意性とされる人間の精神機能の駆動態として、その様式、恣意性を限定する言語の線状性、発語運動上の制約関係との間の相互作用、重合状態の中での、言語の意味の単位「シーニョ」の創出過程と重なり合い、その格納様式、群化の構成として、構築されつつある言語の体系とは重なり合う体系と、その流れをもって構成されるところの構造として理解される。

7・神話ストーリーの変換のバリエーションと言語の恣意性の展開過程

言語の体系の現段階は、共時変換の結果でありつつ、通時変換を抱えつつ、地質学的な歴史時間において普遍態でありつつ、しかしながら変換の過程にあると言えよう。その時間制は、母国語集団的な言語の体系の構築過程として理解されよう。

神話論理において示された変換、そのバリエーション、隠喩、換喩、反転等に、さらなるアナロジーを重ね、あるいは対立する二つの両義的な意味を具有する媒介項（蜜や灰）、中間項を関与させて展開するという変換過程は、人間の精神機能、その展開の様態と同調的であろう。それはソシュールが示した、言語の体系において示された第二の恣意性とは同調的であり、「シーニョ間の横の関係」として説明され、「シーニョ」間の「差異の二項対立関係」をもって群化をはたしている、その体系の生成過程、その時間性と重なると言えよう。

※第二の恣意性:「言語内の記号同士の横の関係（○↔○↔○）に見出されるもので、個々の辞項のもつ価値がその体系内に共存する他の辞項対立関係からのみ決定されると言う恣意性のこと[12]」と説明されている。

「シーニョ」間の横の関係、文法的カテゴリーに見出される結合様式、「 シーニョ」の布置（概念の配分と大きさ）・分節の恣意性 それらが集団的に構築された現段階としての、言語の**体系（ルール）であり、それは恣意なる精神機能、類推作用に対応する「群化」をなす言語の体系（変換のルール性）とされる。**

『音と意味の６章」の序説は、「固有の表意作用はもたないが、表意作用を形成する手段となる音素と同様、近親相姦の禁止は、別個のものとみなされる二つの領域のつなぎ目をなすと私には思われた。」
「こうして、音と意味との文節に、他の平面で、自然と文化との文節が対応することになったのである。そして形式としての音素が、言語的コミュニケーションの打ち立てる普遍的手段として、あらゆる言語に与えられているのと同様、近親相姦の禁止は、その否定的表現だけに限るならば普遍的に存在し、これもまたある空虚な形式を構成する。[13]」

それはソシュールの言語記号論と、レヴィストロースの神話論理における神話ストーリーの変換関係の同調性を示し出しており、さらに「だが、空虚であってもこの形式は、生物集団の文節が可能になると同時に必須ともなって交換の網の目をつくりだし、これを通して集団相互のコミュニュケーションが生じるためには不可欠なのである。[14]」とする婚姻規則、その構造に同調しているとして示されている。(2022/07/02)

---

[12] 丸山圭三郎編　『ソシュール小辞典』P86　1985 年 2 月 10 日・
[13] ローマン・ヤコブソン『音と意味についての６章』p9-10 みすず書房　2008 年 11 月 11 日
[14] 同上